

特集
島根
～神々の国の「田舎」づくり～

Special Features
Shimane
Constructing "pastoral districts" in the kingdom of the gods

攻める(未来の創造)
Advance (Create the future)

未来の応援団づくり

～修学旅行で漁師民泊と漁業体験～

池田高世偉

IKEDA Kosei

隠岐の島町/商工観光課/課長補佐



1—かなぎ漁はすげエー(すごい)

「やったー!採ったー!」「わあー!すごい!」と船上で大きな声が響く。喜びを身体全体で表現して、島の伝統漁法の「かなぎ漁」でサザエ採りを体験した生徒の歓声である。これは大阪市の中学生が離島で行った修学旅行での漁業体験の光景である。ここは日本海に浮かぶ隠岐諸島、隠岐の島町である。

かなぎ漁は底にガラスを張った箱で海底を覗き、ヤス(竹竿の先端に金具のついた道具)でサザエなどを突いて採る漁法であり、隠岐の島で生まれ育った人間でもなかなかうまく採れない。

2—隠岐の島町はこげなとこ(こんなところ)

隠岐の島町は、島根県島根半島の北東の沖合約80kmの海上に位置する隠岐諸島最大の島で、「まるい輪の中、心行き交う、やすらぎのまち」を合い言葉に掲げ、平成16年10月1日に西郷町・都万村・五箇村・布施村が合併して誕生した面積242.91km²、人口17,000人程の町である。本土へは、西郷港からフェリーで約2時間20分、高速船で約

1時間10分、隠岐空港から出雲空港へ約30分、大阪伊丹空港へ約1時間で結ばれている。そして隠岐の島の北西157kmには竹島があり、これも隠岐の島町に属している。

島周辺の海岸は大山隠岐国立公園に指定され、美しい海岸線「白島」、奇岩「ローソク島」など雄大な海洋風景や急峻な山並み、奇形とも言える「乳房杉」などが風光明媚な景観を醸し出している。また、古くから遠流の地として、後鳥羽上皇、後醍醐天皇をはじめ多くの貴人、文化人が配流された島として広く知られる。さらに時をさかのぼれば『古事記』『日本書紀』にも登場し、数々の伝説が息吹く島としても知られている。

島では、後鳥羽上皇を慰めるために始まったと言われる「牛突き(闘牛)」、島挙げて徹夜で慶事を祝い執り行う隠岐独特の人情相撲と呼ばれる「隠岐古典相撲」、北前船の風待ち港として栄える中で謡い継がれた隠岐民謡「隠岐しげさ節」などの伝統文化も多く継承されている。

3—なあーせ(なんで)、修学旅行を

観光は“観る”だけのメニューを中心とした5～10月の



■写真3—奇岩「ローソク島」



■写真4—巨木「乳房杉」



■写真5—名勝「白島海岸」

成を目標とした。そのため修学旅行の形態は、必ず1泊は田舎暮らしを体験する「民泊」とし、基本的に漁家、農家等の家に2～5名

の生徒が泊まり、各民泊先で漁業や農業を体験するものとした。

漁家では「釣り」「刺網漁」「網の補修」「養殖業の仕事」などを、農家では「野菜の苗植え」「田植え」「牛突き牛の散歩」などを体験することが主なメニューである。体験メニューはあくまでも民泊先の考えとし、生徒達は民泊先に教えてもらいながら、自分の獲った魚を自分でさばき、自分が収穫した野菜で料理を作り、民泊先と話をしながら食事をするなど、普段の生活ではできないことを体験する。

こうして計画した修学旅行だが、すぐには誘致ができない。誘致には少なくとも3年はかかる。これは中学や高校の3年間で1クールとすることから、2年目で行き先を変えることは学校サイドとしてまずしないと言う理由からである。このため町も平成13年から誘致に取り組み、幸いにも平成16年に1校誘致したことを皮切りに、平成19年には3校の誘致となった。来島校数から見ると微増ではあるが、人数は実に約5倍もの増加となり、観光の目玉となった。

「短期滞在型」が主体であり、観光客入り込み数は、近年横這い状態で推移している。恵まれた自然・歴史・文化的資源は“観る”観光としての活用度は高いが、史跡・景勝めぐりが中心のコースが大半である。そのため隠岐地域全体の主要観光地の連携度が低く、島内観光の魅力を引き出せず、リピート客や滞留客を増加させるには至っていなかった。また、全国的な観光形態が“観る”から“交流・体験する”へと変化してきているが、体験型観光に結びつく農林水産業との連携も不十分であり、多様化するニーズに対応できていなかった。

このような状況の中、改めて島の独自性を活かした体験型・滞在型メニューを充実させ、観光施策の大きな転換を図った。中でもターゲットを教育旅行に絞り込み、その誘致を一つの柱とし、本格的なふれあい交流体験型の新しい修学旅行の誘致に積極的に取り組んだ。

4—民泊が目玉になっただー(なったんです)

修学旅行のテーマを「自然を体感し環境を考える」「島特有の歴史・文化を学ぶ」「交流・ふれあいを大切にす」とし、併せて迎える私たちの「おもてなしの心」の醸

5—どげしてやったか(どのように行ったか)

民泊受け入れにあたっては、山村交流を実施するなど島外の子どもの受け入れを積極的に推進していた都万村(現都万地区)の民家25軒を会員として、平成16年4月に「民泊親和会」を設立。観光協会を事務局とした。6月には「どのように受け入れるか」「もし気に入ってもらえなかったら」など、会員みんなが不安を抱える中、51名の受け入れを17軒で初めて実施した。みんなの心配をよそに生徒達は生き生きと体験を行い、「楽しかった、ありがとう」との言葉をたくさん残して行った。

この関係者の喜びが民泊のおもしろさとして町内に広



■写真1—島の伝統漁法の「かなぎ漁」



■写真2—「やったー!」サザエをゲット



■写真6—いざ、入島式。後方は高速船



■写真7—マリンレジャーを楽しむ

がり、平成17年7月には約80名の会員により新たな民泊親和会として、鳥根県の「しまね田舎ツーリズム加入認定書」の交付を受け、300名を超える生徒達の受け入れを行うことが可能となった。

6—やってみっと(やってみると)

「孫が帰ってきたみたいで嬉しかった」「食事もおいしいと言って残さず食べてくれて嬉しかった」「食事やだんらんの時は遠慮なく話すことができた」など、ふれあい・交流について民泊関係者はその喜びを話している。また「アレルギー等注意する点があった」「学校側は最小限旅行先について、どんなところか知識として生徒にもたせて欲しい」などの意見もあったが、他人を泊めることについて神経を使い、相当の準備をして対応していることからの積極的な意見と受け取れる。受け入れる以上はより良くと、従来から来島者には過剰とも言えるサービス精神旺盛な島民気質の表れと言える指摘である。

いずれにしても、これら民泊による交流は、生徒だけでなく隠岐の民泊関係者にも新たな感動をもたらした。町の東部、布施地区で民泊漁家の世話人をする木谷武彦さんはその魅力を、「最初は、都会の子は暴力だ、いじめだとテレビ等でやっており、どんな子が……と不安だった。実際に接すると、そんな意識なんてなくなった。孫達とまた違った情報を得られるし、将来の夢を聞いた

り、友達は大切になどと会話を楽しんでいる。中には、しゃべるのが苦手と言っていた生徒がたくさんしゃべり、一緒にきた友達がびっくりすることも」と語っている。傍らで奥様が、「普段の生活と一緒に心がけている。偶然に主人と誕生日が一緒の生徒がおり、内緒でケーキで祝ったり。一緒に楽しんでいる。面白いよ」と笑顔で話してくれた。

7—生徒がごした(くれた)メッセージ

手前みそではないが、体験した生徒達は口々に「ずっと隠岐にいたいと思いました」「大阪よりも落ち着きました。隠岐にいる時は何にも考えないで楽しく過ごしました」「あの島が好きになりました」「自分で釣った魚を食べるのは初めてだったので、やたら、うまかった」など、それぞれの体験や思いの中でたくさんの感動の言葉を送ってくれた。

中でも来島した大阪の大正中学校の生徒達130名全員は、その感想を俳句にして送ってくれた。その中の作品をいくつか紹介したい。俳句を習ったこともセンスもない私でも、生徒達の思い出の声が聞こえてくるような気がする句である。

隠岐の島—生僕の宝物

わかめ採り船から見える水平線

壮大な隠岐の青空澄んだ海

隠岐の島人の心の温かさ

野いちごの甘みかみしめ笑顔咲く

8—両方がようならんと(良くならないと)

この事業について、民泊親和会の事務局を担当する隠岐の島町観光協会の宇治田渉さんは、「修学旅行は学生生活の中で一生記憶に残る行事の一つ。その記憶が素敵な記憶となるように、そして、再び隠岐へ行きたくなるような良い思い出作りの手伝いがしたい。また、修学旅行は一般の旅行とは違い、生徒が行き先や行動を決めることができず、その内容について、不満に思う生徒



■写真11—サザエ網漁も体験



■写真12—思い出とともに離島

もいるということもある。旅程を決める先生とは連絡を取り合い、全ての生徒に喜ばれるような商品を提案し、より良い旅行にしたい。帰る時には「隠岐でよかった」と言っていたようにしたい」と語っている。

一方、受入先の民泊関係者については、「民泊の受入民家は、漁師や農家等一般の方である。仕事や普段の生活もあるが、やむを得ず又は嫌々受け入れてもらうことは避けたい。やむを得ず受け入れることとなった場合、負担のみを感じてしまい、受け入れそのものが続かず、やめてしまうとも考えられる。受け入れを『趣味の一つ』として捉えて、実施していただくよう努めたい。民泊の受け入れは『仕事を休んだり、普段の生活リズムを崩したりと良いところが無い』ではなく、『色々な生徒達と交流ができ、教えることもあるが、逆に学ぶことがあり楽しい』とプラスに感じてもらえるようにしたい」と、生徒達と民泊関係者の相互が良くなることを念頭に、この事業に対する思い入れを語ってくれた。

9—こいからは(これからは)

来校数が増え、人数が増えてくると嬉しい反面その手配に追われ、民泊会員と事務局との連絡調整が不足し、宿泊者名簿の遅配や行程の説明不足等のトラブルが続々と発生した。それは町内間にとどまらず、学校と民泊関係者との、些細ではあるが行き違いまで発生することにもなった。受け入れ準備を行う側にすれば、早期の情報提供は当たり前のことであり、改善は急を要する事項であった。

このことを受け、事務局、民泊会員、行政との連携の中で民泊親和会の組織の充実に着手することとなった。従来、事務局としての観光協会が民泊親和会全体を総括していたが、各地区に支部を置き、行政の観光担当

部局(町役場支所等)が支部の事務局として協力することにより、民泊会員と手配する事務局との連携を密にし、より良い受け皿となるようにした。主導はあくまでも観光協会であり、行政を活用するという従来とは違う形での協力体制である。

10—おしまいに(最後に)

本修学旅行は、民泊関係者や町に大きなメリットをもたらしており、さらに積極的に推進しなければならない事業となっている。昔ながらの田舎ののんびりとした生活環境の中、小さな島で大きな感動を体験したことを通じ、「生きる力」を育んだ生徒達がまた町にもどってきて欲しい。

民泊した子ども達は宝。隠岐の島町を第二のふるさととして、また成長してから「島」を「おじさん」「おばさん」を訪ねて欲しい。遊びに来て欲しい。未来の応援団の成長を心から祈っている。



■写真8—スルメイかつくり挑戦



■写真9—真剣に、真剣に



■写真10—「一緒に楽しんでいます」と木谷さん夫婦



■図1—町のロゴ、そのものです